

2019. 3. 3. 降誕節第10主日礼拝式説教

ダビデ王物語講解説教（最終回）

聖書：詩編23篇

『主はわたしの牧者』

ダビデ王物語を半年にわたって聞き続けてきました。今朝はその最後に、ダビデの詩の中でも最もよく詠まれ、詩編の中でももっとも親しまれてきた詩編23篇にご一緒に聞いて、神さまを礼拝したいと思います。

この詩がダビデの人生のいつどんな時に詠われたものか、特定することは難しいことです。むしろ、今わたしたちはダビデの生涯の全体に思いを寄せて、このダビデの詩に聞きたいと思います。

この詩はこう詠い始めます。「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。」原文では、主はわたしの羊飼い、となっていて、わたしのという言葉が入っています。主はわたしの羊飼い。ダビデがこの詩で詠いたかったことは、この一句にすべて込められているといってもいいかもしれません。神こそがわたしのまことの羊飼い。

ダビデは少年のころ、羊の群れの番をしていました。牧童でした。羊のことも、羊飼いのことも彼にとっては慣れ親しんだ存在でした。羊という動物がどんな動物か、よく知っていました。羊は弱い動物です。他の動物に対して、自分で自分の身を守ることがむずかしい。その羊にとって羊飼いというものがなくてならぬもの、羊飼いがいなくては羊は生きていけない、ということ。それと同時に、羊飼いにあって羊を守り育て導く、ということがどれほど大変なことか、ダビデは子どものときから身に沁みて感じてきたでしょう。一方、古代中東では王さまはしばしば羊飼いに喩えられました。それほどに羊は身近な動物であり、羊と羊飼いの関係は人々のよく知るころだった。王は民という羊の羊飼い。ダビデもまた、そのことは心の奥深くで受け止めていたでしょう。かつて羊の群れの番をしていた少年は、今、羊の群れを導きまもる羊飼いなる王としてたてられていました。

そのダビデがここで詠うのが、神こそがわたしの羊飼い、ということなのです。なにも欠けることはない、というのは神以外の羊飼いはわたしにはいない、神という羊飼いにおいてわたしはすべて満たされる、といっているのです。

「主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる。」羊にとっていのちを糧となる緑の野で草という命の糧、そして安らぎ、を与え、いのちの水を与え、羊飼いはわたしに命の漲りを与え、生かしてくださる、そう詠うのです。羊飼いは羊を遠くから見守り続けている、という存在なのではない。羊と共に必要な場所へ行き、必要なものを与えて、休ませ、伴い、活かしてくださる方なのです。

「主は御名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる。」迷子になったり、自分から道はずれていく羊を、羊飼いは正しい道に導いてくださる。ダビデは道に迷い、さ迷ったことも、また道はずれてしまうようなこともしてきました。どうしたらいいのか、わからず、涙流しながら、歩んだこともありました。けれど、わたしの羊飼いはわたしを正しい道へと導きいれ、導き返して下さってきた。

「死の影の谷を行くときも/わたしは災いを恐れない。」死の影の谷、と呼ぶような人生の暗黒の谷を行くとき、羊はさ迷って暗黒の中を、自分がどこにいるかの自覚もないままに、歩いていくこともあった。災いが降りかかってきたこともある。これからも降りかかってくる。だが、わたしは恐れない。

「あなたがわたしと共にいてくださる。」この言葉がこの詩の真ん中に置かれている。原文ではそれはまさに真ん中。迷子になることも、道はずれることも、暗黒の中を歩むことも、災いが降りかかることも、人生はある。先代の王だったサウルからいのちを狙われ、逃亡生活を強いられた時、自分の息子と戦争することになり、都を明け渡すことになって逃亡生活を強いられた時、ダビデにとって災いのときは数多くあった。もちろんそれだけでなく、日常生活の中に数知れないさ迷いの経験がありました。今この詩で詠っているのは、そんな悪いことがあっても、神と共にいてくださるのだから、必ず良い時がやってくる、ということではありません。ダビデの人生は自分から見て、よい時、悪い時、普通のときがあったとしても、ダビデの歩みの全部の真ん中に神と共にいてくださる、それがわたしの人生だ、と受けとめているのです。神が共にいるということは、ただたんに慰めを受けるということではない。あのバト・シェバのときのように、神によって自分の罪があらわにされ、罪人として自分を自覚せしめられ、そして神からの罰と赦しを受け、神によって命新たにされて生きる。共に生きるとはそういうことの全部です。道を外すということは、自分を導く羊飼いかから自分の方から遠ざかっていくことです。羊が迷子になる

ときのように、自分ではその自覚もないかもしれない。気がついたら道から外れていたということかもしれない。羊飼いがいなければ、死んでしまうにも拘らず、羊は道から外れてしまう。まるでそのことの恐ろしさがわからないかのよう。

「あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける。」

羊飼いは鞭と杖をもって羊を導き、オオカミやほかの獣から羊を護るのです。羊飼いの鞭は長く、羊たちが道から逸れようとする、地面をたたいて、行くべき道を示したのです。それはわたしたちにとってみ言葉そのものです。わたしたちはひよっとしたら、ダビデの人生は山あり谷ありだが、それに比べれば、自分の人生など平凡なものだ、と思い込んでいるかもしれない。しかし、それはあくまでもわたしたちの観方であって、神の目から見れば、わたしたち一人も一人も、共にいてくださる神から自分の方から離れていくことにおいて、ダビデより激しい時を繰り返しているのかもしれない。道に迷い、道から外れ、神から離れることにおいて、わたしたちは山あり谷ありの人生を送っているのかもしれない。だが、神はみ言葉をもって、わたしたちを導き返してくださる。共にいてくださる神とは、聖霊なる神ということです。聖霊が働いて、神が共にいてくださることをみ言葉において指し示してくださる。

「わたしを苦しめる者を前にしても、あなたはわたしに食卓を整えてくださる。」わたしを苦しめる者、という言葉は「敵」と訳している聖書もあります。敵とは誰なのか。ダビデの人生は結果的に多くの敵を作ってしまった。やむをないと言えはやむを得ないのかもしれない。もちろんそれらの敵を指しているかもしれない。しかしそれだけでなく、わたしの敵といえば、わたしの罪のことではないか。わたしの悪のことではないか。まさしくわたしを苦しめるもの。その苦しめる者がわたしを取り囲む中で、あなたは喜びの食卓を整え、そのただ中であなたとの豊かな交わりを与えてくださる、と詠うのです。そして、「わたしの頭に香油を注ぎ、わたしの杯を溢れさせてくださる。」香油を注ぐというのは、傷ついた者への癒しの行為、だと言われています。どんなにわたしたちが苦しめる者に取り囲まれても、神の恵みの食卓にわたしたちは招かれ、そこでまことの癒しを受けるといなのです。苦しめる者がわたしの罪であるとするなら、わたしたちにとって、この香油の注ぎとは、イエス・キリストの十字架に他ならない。羊飼いはわたしたちの罪の真中に立ってくださるのです。

「いのちのある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追う。」

羊飼いなる主が共にいてくださる、それは、わたしたちの人生は放っておかれた人生なのではない、ということです。見棄てられることはない、ということです。どんなわたしであっても、恵みと慈しみとがわたしを追っかけてくるのだ、とダビデは詠うのです。ダビデは、この恵みを受けとめ、信じていたからこそ、ダビデの人生を生き抜いていったのです。苦しめる者も、敵も、わたしたちの人生からなくなることはない。ダビデの歩みは死に至るまで、自分の中に矛盾や葛藤や分裂を抱えていた。だが、いのちのある限り、恵みと慈しみとはいつもわたしたちに与えられるということです。

「主の家にわたしは帰り、生涯、そこにとどまるであろう。」神の家に帰るとは、神殿での礼拝のことです。わたしたちの生涯は、さまざまなことに出会いながらも、共にいます神と出会い、その神の言葉に聞き、その神を礼拝する、ということに繰り返し繰り返し帰っていく、生涯、その繰り返しの中で歩いていく、そしてその中で主との交わりを与えられ、慈しみを受けていくそういう恵みに溢れたものだ、とダビデは詠うのです。「生涯そこにとどまるであろう」という言葉は、わたしたちが神の家にずっと住まう、という訳し方と、別の訳し方も可能です。それは、ずっとを主にかけて、主は永遠に、ヤハウェはとわにとという訳です。

主はわたしの羊飼い、という言葉で始まったダビデのこの詩は、羊飼いなる主は永遠に、という言葉で終わっている。それはまさにダビデの万感の思いであったのではないか。恵みの主は永遠に、ダビデはそのことを祈って、生きて、死んだのではないか。

D a t a : 降誕節第10主日礼拝説教

讚美 : 前120、後98

新生教会礼拝堂